文化

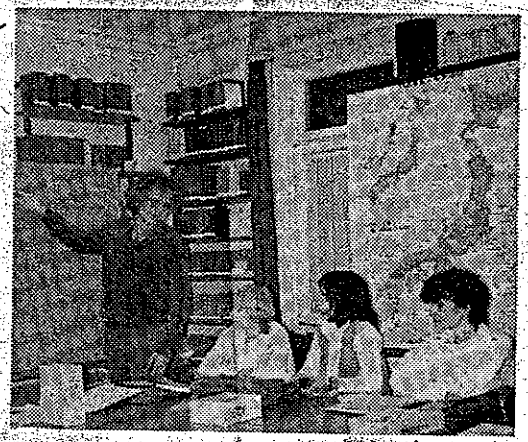
# 日本思想研究の宝庫

## 貴重な書物の寄贈3000冊

昨年十一月、日本から西ドイツ・テュービンゲン大学日本文化研究所に、約三千冊に及ぶ貴重な日本思想研究書が寄贈された。話は、私がテュービンゲン大学日本学主任教授として就任した一九八四年、横浜国立大学教授の内田芳明氏より一通の手紙を受け取ったことから始まる。私と内田氏の出会いは、一九七八年に氏が西ドイツ・マルブルク大学滞在中、ボッホムのルール大学で「日本におけるマックス・ヴェーバーの受容」について講演を行った時のことである。私にとって、氏の日本と西洋とを比較した鋭い文化考察は、意味深いものであり、その独自の視座から学んだ量と質は、測り知れない。氏の手紙は、テュービンゲン大学に近代日本キリスト教及び思想史研究の為のアルヒーフ（文庫）を設立したら私を初めヨーロッパの日本研究者にとって有意義なのではないか、という有り難い内容のものであった。

私は氏の好意を喜んでお受けすることにした。氏は多忙の中、発起人となり無教会図書資料センター（森田外雄理事）をはじめ多数の友人、知人、出版社などに呼び掛け、貴重な本を収集する為、奔走して下さった。その結果、明治以降の日本キリスト教史をはじめ思想史に関する書物が二千百冊も集まり、さらに大阪エクス求基金より大阪大学教授の子安宣邦氏の仲介により徳川時代思想史に関する書物九百冊も寄贈されることになった。こうして五十件に及ぶ日本の各方面の方々のご協力の下、このたびテュービンゲン大学に近代日本キリスト教及び思想史アルヒーフが設立されたのである。

テュービンゲンは、シュトゥットガルト市より南へ三十キロ、西南ドイツの森に囲まれた美しい自然の中に静かにたたずむ大学町で、古い大学町として知られるハイデルベルクとともに中世の面影を残すネッカー河畔の古都である。テュービンゲン大学日本学科は、エジプト学、アラブ学、ユダヤ学、イラン学、インド学、中国学、韓国学などから成る文化科学部（学生数三千百三十二人、うち日本学科九十二人）に属するが歴史はまだ十年と浅い。



テュービンゲン大日本文化研究所で＝左端筆者

### クラウス・クラハト

Klaus Kracht　西ドイツ・テュービンゲン大学日本文化研究所長（日本思想史）＝一九四八年、西ドイツ・ディンスラーケン生まれ。七三年、ルール大学で文学博士号（日本学）取得。著書に「近世日本思想史研究――朱子学の鬼神論を中心に」など。

ドイツにおける日本学の歴史は、一九一四年にさかのぼり、カール・フローレンス氏（明治時代に東大文学部教授を勤めた）がハンブルクの植民地研究所で日本学講座を担当したことに始まる。第二次大戦前には、ハンブルクを除いてベルリン、ボン、ライプツィッヒの三大学のみであったのが、戦後、徐々にその数は増え、現在は十二の大学に及び、日本学を学ぶ学生の総数は、約千人に達したと推定される。西ベルリンでは主に日本経済、ボンは文化人類学、ミュンヘンでは日本歴史と文学、ハイデルベルクにおいては文学の他に美術史等々、といったように研究の焦点は、各大学によって異なるが、テュービンゲンは、日本思想史を中心としている。

五、六年前からドイツにおいても日本製品が増えると同時に、日本学を研究しようとする学生も年々増加している。これは、現在他の人文科学、社会科学系の卒業者にとって就職が困難であるのに対し、日本学科の場合、ジャーナリスト、通訳、翻訳家、研究者、外交官、博物館、図書館、大企業への就職など多方面に道が開かれていることも一つの理由と考えられる。

日本学専攻の学生は、最初の二年間、現代日本語を学ばなければならない。二年以降には、文語と漢文も学ぶ。それと並行して、日本歴史や文化、社会などのセミナーに参加する。優秀な学生は、日本に留学し、一、二年間、日本で勉強することになる。帰国後、再び研究室で独自の専門課程に入る訳だが、現在、学生は、副専攻も取らなければならない。例えば、主専攻日本学（単位の五〇％）第一副専攻中国学（二五％）第二副専攻哲学（二五％）あるいは日本学・中国学・民族学といったコンビネーションである。

こうした状況の中で学問をする大前提となるのは、良質の図書であろう。しかし、私がこの研究所に着任した時の図書は、質、量ともにひどく貧弱なものであった。西ドイツの他の日本学研究所と同様、一年間の予算がごく僅かに限られており、一年の間に購入出来る本の数といったら百冊程度で、日本の新聞さえも買うことが出来ないのが現状だからである。日本に興味を持ち、希望をふくらませ日本学科に入学して来る学生が年々増加する一方、一向に研究所の状態が良くならないことに絶望し、何とかならないものかと思案していた矢先に、日本の有志からの援助であった。

これだけの本を収集するには、三十年、四十年、いや、もっとかかったであろう。現在の状態だけでも、近代日本キリスト教及び思想史のアルヒーフとしては、ヨーロッパの中で最も高い水準のものとなった、と言って過言ではないと思う。これから図書の目録を作成し、広くヨーロッパの日本研究者達にも、内容を知ってもらうつもりである。今回、多大な協力をして下さった内田教授をはじめ森田理事、著書を寄贈して下さった多くの著者や出版社、そして野村学芸財団、国際交流基金、大阪エクス求基金等々に対し、紙面を借りて深く敬意と感謝の意を表したい。このアルヒーフはヨーロッパにおいて日本思想研究の Fundgrube（宝庫）となると思う。これが日本とヨーロッパ相互の深い理解と文化交流の接点の一助となることを願ってやまない。

---

「エビぞる」「県にいちゃん」「うなだれ定食」などの流行語を生み、若者文化を創ってきた雑誌「ビックリハウス」が終刊して三カ月余。八面六ピの活躍をみせたあの初代編集長、萩原朔美氏に〝総括〟を聞き、「行っこう「あの進歩の使命は終わった」と〝言〟を

てしまうとしたら、人々は懸命に見、読むのではないか。そんなこと、何とかできないかなあ」

映像人間らしい言葉が――。

「メディア横断連載小説といいますか、連歌メディア版といいますか、そんな自分の手でやってみたい」

この夢を実現するとなると、まず原作が必要だ。萩原朔美氏、今度は小説に進

## 遭難をテーマにした連作を

この一年、〈遭難〉をテーマとした連作に取り組んでいきます。東北の雪深い、私の生まれ故郷が詩の背景になります。その場処